ロマンス諸語に於ける敬称2人称について

Les formes de politesse à la deuxième personne dans les langues romanes.

舟 杉 真 一
Shin'ichi FUNASUGI

0. はじめに

人称は，単に発話者，対話者，発話の対象を指向するだけでなく，言語によっては，発話者がその対話者及び，指向対象との間に作り上げる社会的・情意的関係をも表しうるものである。

本稿では，一般に「敬称」と言われている2人称について，特定的類型論 (Specific typology)[1] による普遍文法の観点から，ロマンス諸語を分析してみたいと思う。

1. 敬称2人称の分類

2人称代名詞が対話者との関係によって使い分けられる場合には，一般に，「親称」と「敬称（尊称）」という2つに大きく区別される。親称は，親しい間柄のものに対して使われると同時に，目下のものに対して使われ，時には，軽蔑の意をも含みうる表現形式であり，一方，敬称（尊称）は，相手に対する尊敬を表わす場合に使われると同時に，親しくない相手・初対面の相手に対して使われ，相手との距離感を表わす表現形式となる。

形態的には，一般に，親称となる形態が本来の人称体系に属しているのに対して，敬称の方は，なんらかの形でこの体系から逸脱するものとなっている。即ち，敬称が親称に対して有標となっている。[2]

本章では，この有標となる敬称について次の観点から分析を試みることにする。

まず，敬称を区別するかしないかで大きく2つに分けることができる。「敬称を区別する言語」は，敬称として，「人称代名詞を利用する言語」であるか「人称代名詞以外の語を用いる言語」であるかにより細分され，また，「数」，すなわち，話しかける相手が単数であるか複数であるかによって敬称の形態を区別するかしないか，「性」，すなわち，話しかける相手の性別によって，形態を区別するかしないか，及び，「敬称と結びつく動詞の人称」という3つの基準からさらに細かく分類することができる。

このような観点からロマンス諸語，及び，それ以外の主要言語をも含めて分類してみると，表1，表2，表3のようになる。[3]

1—1 人称代名詞を利用する言語

「人称代名詞を利用する言語」については，2人称複数形の代名詞を利用するもの，すなわち，同じ人称での「数」の転換を利用するものが一番多く，この場合，話し相手の性，数についての区別はみられない。ロマンス諸語関係では，その源である俗ラテン語をはじめとして，フランス語，オック語，カタロニア語，ガリシア語，レト＝ロマン語 (Sursilvan, Sutsilvan, Surmiran)，一部のイタリア語がこのタイプに属する。

次いで多いのは，3人称複数形を利用するもので，この場合も話し相手の性，数についての区別はみられない。

表 1 敬称を区別しない言語

アルメニア語[1]	ギリシア語[2]	古典ラテン語	ア・ルーマニア語[3]
アイスランド語[4]	スウェーデン語[5]	英語[6]	ヘブライ語
アラビア語①[7]	広東語	上海語	

（……は主語人称代名詞が義務範疇ではない言語。敬称の種類が２つ以上あるものについては，頻度が高い順に番号を付した。表２，表３についても同じ。）

表注

1) ３人称代名詞には敬称の区別がみられる。
2) 現代ギリシア語では，敬称として２人称複数形の代名詞を用いる場合もある。この場合，動詞も２人称複数形となる。対話者の性別，人数による形態上の区別はない。
3) ア・ルーマニア語のテキストが初めて現われるのは18世紀であり，それ以前の言語状況については不明であり古典ラテン語の体系を保持したため敬称を区別しないのか，俗ラテン語の段階にみられるような敬称区分，あるいはその他の敬称区分が失われてしまったのかは断定できない。
4) 敬称として使われた pér は，今日では事実上すたれ，敬称の区別は行なわれなくなっている。pér が敬称として用いられていた時は，動詞は２人称の複数形を用いた。
5) 敬称として２人称複数形の代名詞が単数にも使われることがあるが非常にまれである。
6) you はもともと２人称複数形の形であり，14世紀頃から単数形にも用いられるようになったものである。
7) 大使，大臣などの特定の重要人物に対しては敬称として，単数の相手に対しても２人称複数形が用いられる場合もある。

表 2 敬称を区別する言語……他の人称の代名詞を利用する言語

利用人称	動詞の人称	数の区別	性の区別：する	性の区別：しない	
2PL	2PL	する			
		しない		サンスクリット①[8] 現代ペルシア語 ブルガリア語 チェコ語 現代ギリシア語 俗ラテン語 カタロニア語②[10] レト＝ロマン語 (Sursilvan, Sutsilven, Surmiran)[11] ガリシア語②[12] フィンランド語 プロアナ語	パンジャビー語 アルバニア語 セルボ・クロチア語 ロシア語 イタリア語②[9] フランス語 アラビア語②[13] トルコ語 バスク語①[14]
	なし	単数のみ		北京官話[15]	
3	3	する	レト＝ロマン語 (Ladin)[16]	イタリア語①[17]	
		しない			
3PL	3PL	する			
		しない		デンマーク語[18] ノルウェー語	ドイツ語[19]

略号 PL：複数形

表注

8) 2人称の敬称代名詞としては，他に，「神聖な」「神」を表わす語から派生した形もある。この場合，動詞は3人称が用いられる。

9) 2人称複数形の voi が，複数の相手に対しての敬称となるのは，現在では，イタリア南部の俗語的表現であり，使用が限られている。敬称として一般的なのは3人称を利用し，相手の数により単数形・複数形を区別する形式である。

10) 他に，3人称動詞をとり，距離感を伴った敬意を表わす vostè, vostès がある。

11) レトーロマン語は方言により差異がみられる。Sursilvan, Sutsilvan, Surmiran 方言は2人称複数代名詞を利用し，相手の性・数の区別を行わないが，Ladin (Puter, Vallader) 方言は，3人称代名詞を利用し，性・数の区別を行なう。

12) 今日では古風な用法であるが，コルーニャ県西部では親密な敬意表現として用いられている。この他に，スペイン語起源の3人称を利用した vostede, vostedes がある。

13) 表注 7) 参照。

14) 昔は，2人称は，単数と複数の区別しなかったが，近隣のロマンス語の習慣に習い，複数形が敬称に用いられるようになり，「君達，あなたたち」のためには新たに複数形 zuek が作られた。バスク語の場合，親称はフランス語やスペイン語ほどには用いられない。他に，3人称動詞とともに用いられる berori という形がある。berori は強調形・再帰形 ber- と2人称指示詞が結びついた形で，敬称度が高くなる。

15) 一人の相手に対して用いられる敬称您 nin は，語源的には，2人称複数形你们 nimen が縮約されてできたものと考えられる。您が使われ始めたのは元以降のことである。複数の対話者には，親称・敬称の区別がなく你们が用いられる。

16) 表注 11) 参照。

17) 単数形には，3人称単数女性形の補語人称代名詞が，複数形には，3人称複数補語人称代名詞が用いられる。

18) 動詞は人称・数による変化なし。

19) 17世紀には3人称単数形が親しい話しかけをしない相手に対して用いられた。今日のように3人称複数形を使うようになったのは18世紀になってからのことである。

表 3 敬称を区別する言語……人称代名詞以外の語を利用する言語

動詞の人称	敬称数の区別	敬称性の区別	
		する	しない
2PL	する		
	しない		ルーマニア語[20]
3	する	ポーランド語[21] ポルトガル語[22]	サンスクリット[23]② スペイン語[24] カタロニア語[25]① ガリシア語①[26] ハンガリー語
	しない	バスク語②[27]	
S	する		
	しない		オランダ語[28]
PL	する		
	しない		ヒンディー語[29]
なし	する	ビルマ語[30] インドネシア語[31]①	チベット語 タイ語 朝鮮語 日本語[32]
	しない		インドネシア語[33]② アイヌ語[34]

略号 S：単数形

表注

20) 単数形として dumneata という形もあるが，これは相手が自分より年下である場合や，それほど親しく

ない場合に用いるもので，一般的な敬称としては，相手の数に関係なく dumneavoastră (<domnia voastră) を用いる。

21), 22) 敬称の2人称以外の意味は，「～さん」にあたる語である。

22) 他に，2人称複数形の vos が使われることもあるが，今日では一般的でない。

23) 表注 8) を参照。

24), 25), 26) スペイン語・カタロニア語・ガリシア語ともに，「あなたのお恵み」という意味の語。

25) 表注 10) を参照。

26) 表注 12) を参照。

27) 表注 14) を参照。

28) 敬称のU（又はu）は Uwe Edelheid「貴殿」の略。動詞の人称については，直説法現在形単数は1人称のみが異なり，2・3人称は同形。複数はすべて同形。直説法の過去形では，単数・複数の違いのみ。

29) 敬称の2人称である ꠞꠟꠋ は，話題の中心人物を指し「このかた」を表わす代名詞と同形であり，これも敬意表現の対象となる語である。

30) 相手の官職名や宗教上の功徳に関係ある語を用いたり，相手の年齢，男女別によって親族関係を表わす語を用いる。

31) 敬称の2人称は用語が多様であるが，よく用いられるものとしては，単複同形で，階級・性別・年齢に関係なく用いられる anda と，成年男子に用いられる tuan，複数形 tuan-tuan，既婚女性に対して用いられる nyonya，未婚女性に対して用いられる nona がある。後者 tuan の原意は「貴顕」である。

32) 一般的な敬称である「あなた」は，3人称単数の「彼方」が転用されたものである。他に，敬称として「先生」などの役職名も用いられる。なお，動詞は人称による変化をしない。

33) 表注 31) を参照。

34) 敬称の体系は方言ごとに差がある。ここで取り上げたのは，石狩方言である。十勝（帯広）方言では，1人に対する敬称 anokay と2人以上に対する敬称の anutari を区別するが，文法上はいずれも複数扱いとなる。他には，不定人称が用いられる方言もある。

人称代名詞は義務範疇ではないが，人称は人称接辞の形で表わされる。

ロマンス諸語のうち3人称代名詞を利用するものとしては，3人称主語人称代名詞を利用し，相手の性・数を区別するレト＝ロマン語 (Ladin) と，相手の数のみを区別するイタリア語があげられる。イタリア語の場合，相手が単数の場合には，3人称単数女性形の補語人称代名詞を，相手が複数の場合には，3人称複数形の補語人称代名詞を用いる。

1—2 代名詞以外の語を利用する言語

「代名詞以外の語」を利用する場合，ロマンス諸語では次の2つ型がみられる。

① 所有形容詞（あなたの）＋「権力（支配，統治），品性（高貴さ，恩恵）」という意の名詞句が敬称になったもの

この場合，名詞句は縮約され1語となって用いられる。ロマンス諸語では，スペイン語，カタロニア語，ガリシア語，ルーマニア語がこのタイプに属する。この4言語のいずれも相手の性による代名詞の形態の区別は行なわないが，スペイン語，カタロニア語，ガリシア語は相手の数による形態の区別をし，それに応じた3人称動詞と結びつくのに対し，ルーマニア語は，相手の数による形態の区別は行なわず，2人称複数動詞と結びつき，先の1—1の「数の転換」を保ちつつ，主語人称代名詞が名詞句に代わっている。

② 呼称「～さん」の「さん」（英語の Mr., Mrs., Miss にあたる語）が独立して敬称となったもの

この場合，相手の性・数に応じた形態を持ち，動詞が人称変化する場合には，3人称と結びつく。

ロマンス諸語では，ポルトガル語がこのタイプに属する。ただし，ポルトガル語の場合には，定冠詞＋呼称と

なる。

この2つのタイプの他に，ロマンス諸語以外の言語では，さらに，次の3つのタイプが認められる。

③ サンスクリットにみられるように，「神」「神聖な」などの語から派生した形を用いるもの

④ ビルマ語などにみられるように，相手の官職・職業名が敬称として使われるもの

⑤ ヒンディー語・日本語などにみられるような「場所を表わす指示詞＋人」が1語となり敬称として使われるもの

②の呼称は語源的には，「主，領主，支配者」を意味する語で，③，④と一緒に大きく一つにまとめることも可能である。

1—3 複数の敬称型を持つ言語

いくつもの敬称型を持っている言語も少なくなく，タイ語・インドネシア語のように，敬称体系が非常に複雑なものもある。

ロマンス諸語では，カタロニア語に2つのタイプが共存しているが，用法の差異が認められる。すなわち，2人称複数代名詞 vos を使う場合は，親しさを含む丁寧，尊厳，尊敬を表わすのに対して，3人称動詞と結びつく vostè の方は，よそよそしさを伴う敬意，すなわち，相手との距離感が感じられる用法となる。

イタリアでは，一部の地域で，2人称複数形の voi と3人称補語人称代名詞を利用した敬称 Lei とが共存しているが，その場合には，3人称補語人称代名詞を利用した敬称の方が敬称度が高くなる。(4)

2. 敬称2人称の通時的概観

2—1 古典ラテン語と俗ラテン語の2人称体系

親称と敬称の区別は，ロマンス諸語の母体であった古典ラテン語には見られないものである。

古典ラテン語の2人称は，単数形の tu と複数形の vos 区別するだけで，親称と敬称の区別はしなかったが，俗ラテン語では，権力者に対しては，一人であっても，丁寧な呼びかけの形として，複数形の vos が使われた。この理由としては，Jean Aitchison が，一つの説として，東のコンスタンチノープルと西のローマに二人のローマ皇帝がいた時代に，同時に，両方の皇帝に呼びかけていることを暗に意味して，その一人一人に対しても vos で呼びかけていたのが習慣化したという説をあげている。(5) しかし，先ほどの表2，及び，Brian F. Head の調査結果(6) にみられる通り，敬称として2人称複数形を利用する言語がかなり広範囲にわたっていることを考えると，形態的に，無標である親称に対して，有標となる敬称をつくり出すための最も利用しやすい手段が「数」を変更させることであり，本来，2人称複数は，「複数の話し相手」あるいは，「単数の話し相手＋3人称」と拡大的なものであり，このような拡大的な性質が，話し相手を神，あるいは，話し相手の高貴さ，権力などの全体性，絶対性に結びつけ，その結果，敬称の意味を持つようになったと考えた方が普遍的ではないだろうか。

いずれにせよ，このような vos の使用に端を発して，社会階層により2人称の使用体系が変化してきた。つまり，上流階級の人々は，お互い，あるいは自分より身分の上の人に対しては，相手が一人であっても，尊敬のしるしとして vos で呼びかけ，下層階級の人に対しては tu と呼びかけた。下層階級の人々は，上流階級の人には vos で呼びかけたが，お互い，あるいは自分より身分の下のものに対しては，相変わらず tu と呼びかけた。

このような体系がそのままロマンス諸語に受け継がれたとしたのならば，2人称敬称代名詞は，2人称の複数形を利用し，2人称複数形動詞と結びつくものとなるはずであるが，先に見たように，現在，これを敬称の一般

的な形式として受け継いでいるのはフランス語，カタロニア語，レト＝ロマン語(Sursilvan, Sutsilvan, Surmiran)だけである。

それでは，ロマンス諸語は，どのようにして現在の２人称敬称代名詞体系を獲得するに至ったのであろうか。７タイプの敬称型のうち，ア・ルーマニア語，フランス語，イタリア語，スペイン語の４つを中心に取り上げ通時的に概観してみたいと思う。

2—2　敬称を区別しない言語

古典ラテン語と同様に，敬称を区別しないア・ルーマニア語[7]は，９～10世紀に，ドナウ川近くのルーマニア人の移住に伴い，ルーマニア語から分かれたという説もあるが，ルーマニア語との共通祖語である共通ルーマニア語から発展した姉妹言語とする方が有力である。同じ姉妹言語でありながら，ルーマニア語は，代名詞化した名詞句を用いて敬称を区別しているのに対し，ア・ルーマニア語は，敬称を区別しない言語である。しかしながら，表１の注でも述べたように，古典ラテン語の体系を保持したため敬称を区別しないのか，俗ラテン語の段階にみられるような敬称区分，あるいはその他の敬称区分が失われてしまったのかは，18世紀に至るまでの資料が不足しているため断定し難い。

2—3　２人称複数形を敬称とする言語

２人称複数形主語人称代名詞が２人称複数形動詞と結びつき敬称となるフランス語は，俗ラテン語の体系をそのまま継承したものと考えられるが，古フランス語の時期には，tu と vous の使い分けは厳密なものではなく，同一人物に話しかけるのに，tu も vous 使われていた。[8] J. Frappier は，tu が使われるのは，厳粛な状況，あるいは，激しい感情が現れる際であるとしている。[9] 少なくとも，この時期における vous は必ずしも丁寧な呼びかけの形ではなかったようである。

現在，フランス語の主語人称代名詞は省略することはできないが，古フランス語の時期には，他の多くのロマンス諸語同様，省略可能で，規則的に用いられ始めるのは，14世紀の終わりからである。[10] 今日のように義務範疇として確立されたのは，17世紀以降のことで，[11] 敬称の主語人称代名詞についても同様で，今日的な使い分けが確立されたのは17世紀のことである。[12]

この17世紀には，また，別の称敬法が生まれている。すなわち，ポルトガル語と同じく Monsieur, Madame, Mademoiselle などの呼称を主語にして，これを３人称で受けて相手に対する敬意を表わす用法で，現在の一般的な敬称である vous よりも敬称度が高く，最高の敬意を表わすものであった。[13] しかし，このような用法は，フランス語では，次第に，召使が主人たちに対して使うか，飲食店などの店員が客に応対する際などの状況に限られるようになり一般化されることはなかった。

2—4　人称の転換による敬称

人称の転換による敬称法は，話し相手を，本来ならば，相互転換可能な１人称と２人称の体系[14]の外に置くことにより，話し相手と話し手が同一線上に並ばないことを利用したものである。従って，フランス語やイタリア語の例にみたように，「数の転換による敬称」と「人称の転換による敬称」が共存する場合には，「人称の転換による敬称」の方が敬称度が高くなるのである。

これをイタリア語とスペイン語の歴史から確認してみたいと思う。

イタリア語の場合，俗ラテン語に於いてみられるようになった社会階層の上下による tu と vos の使い分けが，親称と敬称として明確に区別されるのは13世紀末である。[15] 一方，現在最も一般的である３人称形の Lei が敬称として使われ始めるのは15世紀頃からである。[16]

この Lei は，語源的には signoria「支配，統治，閣下」を言外に含んだ３人称単数女性形代名詞と考えられるものである。その後，voi と Lei の勢力は次第に逆転し，[17] voi は地方，特にイタリア南部に残る結果となった。地域によっては，この２つの用法が共存する場合もあるが，その場合には，先に述べたように，Lei の方が敬称度が高くなる。[18]

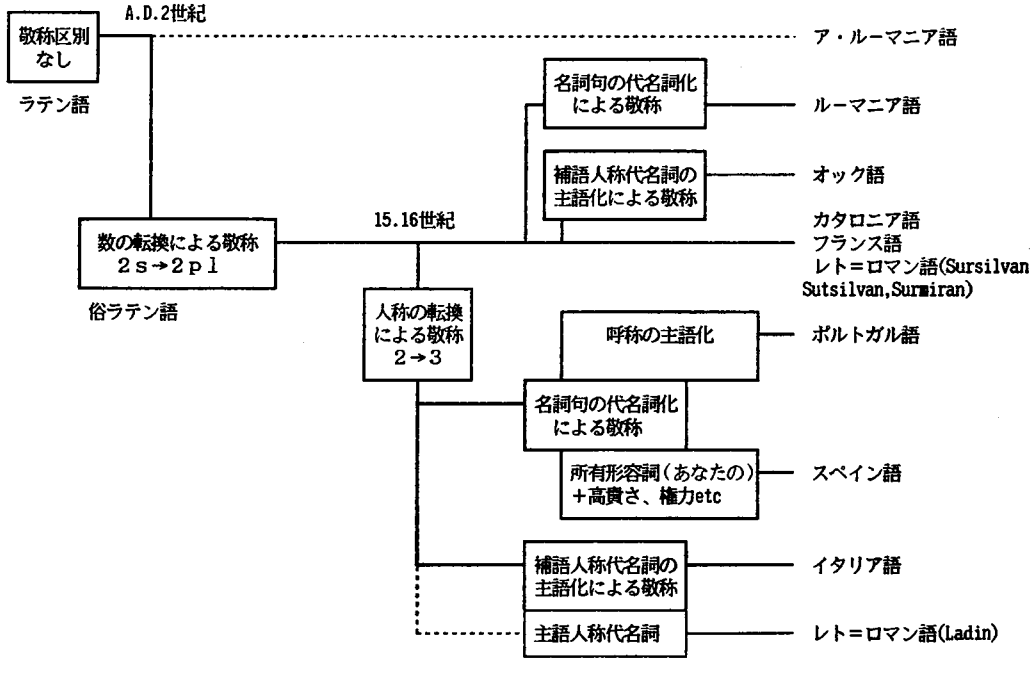
スペイン語では，12世紀には，親称 tu と敬称 vos の使い分けがされるようになり，現代フランス語と同じ様相を呈している。16世紀になると，３人称代名詞 él, ella を転用したものや，vuestra merced, vuestra señoria などの尊敬の意味を持つ抽象名詞を使用する形式が加わった。敬称の vos の用法は，16～17世紀のスペイン演劇作品の中で，貴族同士の会話などの際に相変わらずみられるが，次第に，vuestra merced から派生した usted が優勢となり今日に至っている。このように敬称としての vos が使われなくなった理由としては，16世紀の演劇で，敬称であるべき vos を，親しさに欠ける印として蔑称のように使用している例[19] などから判るように，vos の価値が弱まってしまい曖昧なものとなったため，敬意をはっきりと示すためには，これに代わる形式が必要となったものと考えられる。[20]

3. 結論

ロマンス諸語の敬称タイプを通時的な観点から図示してみると表４のようになる。

俗ラテン語に於て，話しかける相手の社会階層によって人称代名詞を使い分ける習慣が生じたとき，敬称とな

表４



ったのは，２人称複数形を利用したもの，すなわち，数の転換を利用したものであった。敬称としてこの方法は，世界中の言語に広くみられる方法で，本来の２人称の枠内で，数を変え複数形を使うことにより，すなわち，２人称複数形＝話し相手＋３人称ともなりうる性質を利用し，話し相手を話し手以外のすべてに結びつけてしまう拡大的な方法を用いることにより，相手の権力の絶対性を言外に含んだ敬称となるのである。この場合，話し相手の性別，単数複数は区別しないのが普通である。現在，これを敬称の一般的な形式として受け継いでいるロマンス諸語はフランス語，カタロニア語，レト＝ロマン語（Sursilvan, Sutsilvan, Surmiran）だけであるが，オック語についても，現在の２人称複数主語代名詞の形態が異なるだけで，敬称法としては全く同一なものと考えられる。また，ルーマニア語のように，主語代名詞のみが，名詞句を代名詞化したものに代わったものもある。

いずれにせよ，通時的には，ほとんどすべてのロマンス諸語に於てこの方法が基盤となっていることは，先にみた通りである。

このような２人称複数形の敬称体系が，時間とともにその敬称価値が薄れ始めた言語では，それに代わるさらに敬称度の高い敬称法が生まれてくることとなった。すなわち，人称の転換を利用するものである。これは，話し相手をその話し相手が持つ高貴さや権力，職業，称号，あるいはロマンス諸語にはみられないが，指示詞＋人を表わす語などに置き換えたり，それらを受ける意味において３人称の代名詞を利用することにより，間接的・迂言的に相手に呼びかけることにより敬称を表わそうとする方法で，本来転換可能な１人称と２人称の体系の外に置くことにより，話し相手と話し手の相互関係が遮断されることを利用したものである。この場合，代名詞化した名詞句の性質により，イタリア語・スペイン語のように相手の数を区別するもの，ポルトガル語，レト＝ロマン語（Ladin）のように相手の性・数に応じた形態をもつものがある。

以上，ロマンス諸語を中心に世界の主な言語の敬称２人称について概観してきたわけであるが，相手に敬意を表わす方法は，もちろん人称のレベルだけに限られるわけではなく，その他の方法，例えば，動詞を中心とした表現方法によるものもみられるし，また，その両方が組み合わされる場合もあり，人称の段階で，敬称を区別していないからといって，その言語が相手に敬意を表わす表現方法をもたないということにはならないことは言うまでもない。ただ，今回の調査から判ったように，人称による敬意法は，言語によっては，非常に複雑な体系を有するものもあるが，全体として，限りのある，しかも，かなり少ない敬称型に分類されてしまう。これは一つの驚きであり，一部ではあるが言語の本質，普遍的な性質というものを我々にみせてくれるものではないだろうか。

注

(0) 本稿は1989年５月27日，文化女子大学にて開催された日本ロマンス語学会第26回大会での口頭発表に加筆，補正したものです。席上，貴重な御教示を戴きました先生方に厚くお礼申し上げます。

(1) 19世紀に確立された言語全体を，孤立語，膠着語，屈折語，抱合語などに類型化しようとする全体的類型論（Holistic typology）に対して，特定的類型論（Specific typology）は，ある特定の言語上の特徴を取り上げ，それを中心にどのようなタイプの言語が認められるかという観点から分類を行なう方法である。この方法は言語の類似点の追求，つまり普遍文法の研究手段として注目されているもので，スタンフォード大学のグリーンバーグ（Joseph H. Greenberg）らによる研究が有名である。

(2) Head (1978) p. 151～195.

(3) 表では，田中春美（1982）の言語系統表に基づいて，言語を配列した。
敬称の種類が２つ以上あるものについては，頻度が高い順に番号を付した。
言語によっては，主語人称代名詞が義務範疇ではなく，使用された場合には，「主語の強調」「他との対立」などの意を含む言語もある。それらについては点線による下線で示した。

また，敬称の「数」「性」の区別については，代名詞の形態は同じでも，形容詞・過去分詞・動詞などの一致により，男性・女性，単数・双数・複数を区別する言語もあるが，表での「数」「性」はあくまで，主語となる人称代名詞の段階を前提としている。

(4) 藤村 (1986) p. 80, 82.

(5) Aitchison (1978) p. 171.

(6) Head (1978) p. 151～195.

(7) ギリシア，アルバニア，ユーゴスラビア，ブルガリアの所々で話されているルーマニア語の1種。マケド・ルーマニア語ともいう。これに対し，ルーマニア社会主義共和国で話されている，いわゆるルーマニア語は，ダコ・ルーマニア語というが，本稿では，単にルーマニア語として扱う。

(8) Grevisse (1980) p. 560.

(9) Brunot & Bruneau (1969) p. 231.
この問題については，他に，Kennedy (1972) を参照。

(10) ibid. p. 225.

(11) Grevisse, op. cit., p. 534.

(12) しかし，その後も，tu と vous の用法（意味内容）には，時代によって多少の差異が見られる。詳しくは，Dauzat, A (1977) p. 111～112, Brunot, F (1967) p. 689 を参照。

(13) Brunot & Bruneau (1969) p. 233.

(14) 人称については Benveniste (1966) を参照。

(15) Niculescu (1974) p. 79.

(16) Rohlfs (1968) p. 182.

(17) Lei が優位に立った理由については，藤村 (1986) を参照。

(18) Niculescu (1974) を参照。

(19) Lope de Rueda, El Deleitoso (1565) の諸作品参照。

(20) スペイン語の2人称代名詞体系については山下 (1985) に詳しい。

参考文献

Aitchison, J. 1978 Linguistics, TEACH YOURSELF BOOKS, Hodder and Stoughton.

Benveniste, É. 1966 Problèmes de linguistique générale, Gallimard.

Brunot, F. 1967 Histoire de la langue française, Librairie Armand Colin.

Brunot & Bruneau 1969 Précis de grammaire historique de la langue française, Masson.

Dauzat, A. 1977 Le Génie de la langue française, Librairie Guénégaud.

藤村昌昭 1986 「イタリア語における clitic の機能と構造」，ロマンス語研究19，日本ロマンス語学会1986。

Grevisse, M. 1980 Le Bon Usage, Duculot.

Head, Brian F. 1978 "Respect Degrees in Pronominal Reference", Greenberg. J. M., Universals of Human Language Volume 3 Word Structure p. 151, Stanford University Press.

Kennedy, E. 1972 "The Use of Tu and Vous in the First Part of the Old French Prose Lancelot", History and structure of French, Oxford Basil Blakwell.

Niculescu, A. 1974 Strutture allocutive pronominali reverenziali in italiano, Olschi, Firenze.

Rohlfs, G. 1968 Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti (Morfologia), Einaudi.

田中春美他 1982 田中春美他，言語学演習，大修館書店。

山下好孝 1985 「中南米スペイン語に於ける二人称代名詞体系について」，ロマンス語研究18，日本ロマンス語学会1985。